大東文化大学紀要四十六号

国木田独歩論
——その思想の軌跡——

The theory of Kunikida Doppo——a trace of the thought——

栗林秀雄
Kuribayashi Hideo

近代の歴史にあって、その思想的、政治的発言、文化的発言等あらゆる言説が文学の、とりわけ小説という形式を借りてなされてきたことは事実であった。このことは、逆に明治・大正の文学、小説を詳細に読み解くことにより、その時代の思想的、政治的、文化的側面を掴み取ることが出来るのではないか、ということもできるのである。明治維新もようやく落ち着きを見せ、新たな国家建設のために試行錯誤しながらも憲法の制定、国会開設を迎え、〝国民〟にまさに「国民」としての意識改革を強いると同時に、国家意識、国権意識をも植え付けるべく種々の政策を施行していった。自らの父母の時代に維新を経験し、維新以後、明治人としてのいわば第一期生として明治時代と共にその人生を送った、例えば、夏目漱石、国木田独歩、島崎藤村等の詩人作家達の文学活動は、自ずから限定された文学という枠組みから政治的、文化的、思想的諸般の問題について、その言説を展開せざるをえなかった。そこで、本稿においては、明治四年生まれ（諸説があるが、現在は一応この説に従いたい。）である国木田独歩を採り上げ、その人生の軌跡を追うと共に、その抱懐した思想の推移、変転を追究することにより、明治文学の一側面を掴み取りたいと考えた。

＜文学的出発＞

国木田独歩は、明治二〇年青雲の志を抱いて上京して来るが、その上京の目的は両親の強い期待、即ち、父専八は、かつて龍野の脇坂藩の会計方を務めた武士の家系が、明治維新を挟んで山口県の地方裁判所の書記官補という地位に甘んじなければならなくなったこと、維新の覇者として

中央政界に雄飛する長州藩の膝下で悶々たる生活を送る国木田家の前途を長男独歩に、その再興を期待したのである。即ち「立身出世」を願ったのである。独歩自身も「ナポレオン、豊太閤」を夢見つつ、「学問ノススメ」や「西国立志篇」に促されて将来を夢想していた。作品「非凡なる凡人」の主人公桂正作に仮託した独歩のこれらの書からの影響ぶりを理解することができるが、徳富蘇峰の『将来之日本』『新日本之青年』に触発されながら、今はともかく「群書ニ渉レ」（明治二一年三月『青年思海』）ことが肝要であると自らを戒めつつ東京専門学校に籍をおきつつ、『青年思海』や青年文学会の同人として、政治的、文化的言説を発表し、言論界に一歩を踏み出して行く。一方、友人の勧めもあり、キリスト教に帰依することとなるが、ここに独歩の最初の精神的自律の萌芽を見ることができる。即ち、永遠なるもの、広大、無窮、遍くしろ示す神の意志を感得し、その具体的日常的実見できる対象として「自然」を把握することとなるのである。折りしも、校長排斥運動の中心的存在としてストライキを決行し、その挫折による東京専門学校退学という現実に直面せざるをえなくなる。そして、当時両親がいた山口県麻郷村へ帰郷することとなるが、この際、作品「忘れえぬ人々」に採りいれられた明治二四年五月三日の日記が記されることとなる。この時、独歩は、初めて自らの人生のあり方について思い至る苦悩とも、哀しみとも生きる術の発見による悦びとも言える深い感動の内に瀬戸内海を航行するのである。「愛と誠と労働」を自らの人生訓として、しかもその具体的存在として「山林海浜の小民」に自らの人生を仮託して行くこととなるのである。一旦帰郷した独歩は、山口の萩に松下村塾を訪ね、それを模倣した「波野英学塾」を開校したりするが、ほど経て二五年六月八日再び上京する。この再度の上京については、独歩の心の中は、依然として「立身出世」の野望を潜めつつ、しかし、最初の上京の時とは違った問題が心のうちに萌芽していた。即ち、① How to live、② What am I ? という二つの問題が考究せねばならない問題として独歩の眼前に迫ってきたのである。具体的には、① How to live という「人生如何にして生きるか」という問題は、①いかなる職業をもって人生を送るか、②いかなる思想・信条・倫理観を持して人生を送るかという二点に展開され、② What am I ? は、我とは何ぞや?という自らの存在を問う問題として考究、実践しなければならない状況に立ち至ったのである。この時、すでに明治二二年一二月に発表した「アンビション（野望論）」（明治二二年一二月『女学雑誌』）で示した政治的野望を払拭して自己定立させた「経世済民」の士としての自らを再確認し、「人生の教師」としての文学者になることを決意するのである。描出する世界は、「山林海浜の小民」であり、「愛と誠と労働」を旨として生きる人びとの姿である。この後の独歩の人生の教科書は、明治二五年九月に入手した『ワーズワス詩集』となるのであり、この時（明治二六年二月三日）から『欺かざるの記』は起筆され、明治三〇年五月一八日に擱筆され、同時に処女作「源叔父」が執筆されるのである。

〈自然観の成立〉

独歩は、明治二〇年に上京して来て以来の「都会の生活」について「牢獄の中」に居るような息苦しさ、不自由さを感じていた。それは、日々発展を遂げる東京の姿だけではなく、軋み合う人間と人間の政治的、経済的競争と軋轢が原因であった。彼の口をついて出てくるのは、「山林に自由存す」という叫びであった。「あくがれて」上京したが、それは「虚栄」の道であったことを実感せざるをえなかった。有限な人生を、虚栄と虚飾の追求に費やすことのいかに馬鹿げたことであるかを、ひと時の栄華に酔うことの愚かさを、人類の歴史から学んだ独歩の眼には、悠久として時の流れに身を委ね、営々としてその生を持続させている天然自然の姿に卑小で有限な人間の姿を憑依させたかったのである。その叫びに続いて「我この句を吟じて血のわくをおぼゆ」と詠い、そのことを自覚できたところに自らの存在の証を求め、得られていたことが理解できるのである。独歩にとって、自然は、都会生活の中にあって苦悩した時の逃げ場所、避難場所でもあった。いやそのようなネガティブな捉え方だけではなく、むしろ積極的に人間精神の自由と解放の場として自然が捉えられたのである。それは、同時に日常生活の中にあって、林や森や丘や河川や海の自然環境の中に没入することによって得られる肉体的、精神的解放感や癒しの効果の享受とも繋がっていくものであり、日常からの脱出による精神のリフレッシュともなっているのである。と同時にそれは、反日常、反都会、反立身出世、反栄達、反政治思考をも意味していたのである。自然が、人間にとって、愛ずる対象から、自らの存在の証を保証する対象へと大きく変化したことを意味しているのである。この自然観は、この後梶井基次郎の文学思想・世界に流れ込んで行くことをここに付言しておく。(注1)

しかし、この自然観とは相対をなす一方の自然観をも同時に感得せざるを得なかった。それは、北海道開拓の夢を抱いて空知川の岸辺を調査旅行をしたときに、自然の雄大さ、悠久さに圧倒され、人間を寄せ付けない厳然たる自然の脅威を感じ取り、翻って人間の卑小で、有限な存在をいやというほど感得せざるをえなかった体験が、新たな自然観として形成されてきたのである。即ち、人間が、自己の存在を投影し、自らの主体的感性を対象に放出して、しかも自己の客観的立場を揺るがされることなく、自己の主体の内に取り込むことでその感性や存在を証すような自然の景観はもはやここには無く、ただその威容な存在、時の永劫を感知せざるをえない存在としての自然に圧倒されたのである。限りある人間の存在、限りある人生についての考究を独歩自身に強烈にうながすような自然の存在を認識せざるをえなかったのである。この二つの自然観は、その後の独歩の思想形成の根幹をなし、順々としてその思想が展開してゆくことになるのである。

まずはじめに、自由と解放を得られる場所としての自然、苦悩する精神の解放の場所としての自然をもっとも明瞭に表現したものとして作品「武蔵野」(初出は「今の武蔵野」明治三一年一月『国民之友』)がある。そこには、地理的空間としての武蔵野の歴史をのべつつ、林、森、落葉林の美しさ、風、陽の光、太陽、時雨、音、鳥の囀り等々全身をこの自然の中にゆだねることよって、慰藉される心身の相貌が描出されている。

その姿は同時に、都市近郊の有り様であり、むしろ、慰藉される心身の内奥に都会生活の虚偽と欺瞞、虚飾と虚栄に満ちた世界、限りある人生をただ人と人との争い、軋み合いに心くだく人間社会の醜悪なる相貌を、その内奥に堆積させられている姿をも暗示させるのである。このとき、既成の伝統的な自然観、例えれば、花鳥風月、雪月花、等々の営々として築かれてきた日本の伝統的美意識、自然観は、「近代」に目覚めた自意識を慰撫する対象としてはすでに古色蒼然であり、新たな自然の美の対象が求められたのである。たしかに、二葉亭四迷訳の「あひびき」「めぐりあい」などによるツルゲーネフ『猟人日記』の影響を受けつつも、独歩にあっては、自らの幼少青年期からの実体験をもととして、実感をもって描出した世界であった。「鹿狩」（明治三一年八月『家庭雑誌』）、「河霧」（同月『国民之友』）においても同様の世界が展開しているのである。

また、もう一方の自然観については、作品「空知川の岸辺」（明治三五年一一月～一二月『青年界』）が、明瞭に物語っている。その一説に言う。

余は時雨の音の淋しさを知って居る、然し未だ嘗て、原始の大森林を忍びやかに過ぎゆく時雨ほど淋しさを感じたことはない。これ実に自然の幽寂なる私語である。（略）高遠なる蒼天の、何の声もなく唯だ黙して下界を視下ろす時、嘗て人跡を許さざりし森林の奥深き処、一片の木の葉の朽ちて風なきに落つる時、自然は欠伸して曰く『ああ我が一日も暮れんとす』と、而して人間の一千年は此の刹那に飛びゆくのである。

自然の威容に圧倒されながらも、独歩は、人間の生きる姿を、一方で追究する。即ち、限りある人生をどのように送るべきか、とりわけ、いかなる倫理観を持して、いかなる仕事に従事するべきかを考えるのである。その解答は明確であった。即ち、「愛と誠と労働」を旨として、人生の幽音悲調を聴き詠う「人間の教師」としての文学者として、「山林海浜の小民」の姿を、その世界を描こうと思案するのである。

しかし、この時、独歩の心の中には、鬱勃として湧出してくる「運命観」が徐々に形成されてきていた。それは、山野を渉猟することを好んだ独歩が、諸所いかなるところにも散在する「墓所」に誘発されたものであった。人間は、生まれて生涯を送り、終にはこの墓の下に入る運命にあること、終にはこの天然自然の土の中へ回帰する存在であることを痛切に感得することとなるのである。このとき、独歩は、悠久で無窮の自然と対峙したとき、人間の有限で卑小な存在であることを、それは人間の逃れられない運命であることを自身の人生観、生き方、とダブらせながら感得する。この人間は、有限でありいずれ死して自然のふところに回帰するものであるという運命観には、もうひとつ、人間の人知や力では及ぶことの出来ない超越的自然の力が、あまねく人間の存在におよぼしているという運命観も付随していた。この人間にとってただ従わざるをえない人生を、運命として受け入れ、その運命の下にその日その日を大切に、誠実に生きることこそ人生のあるべき姿として規定したのである。ここから、徐々に運命観の枠組みを拡大してゆくことになるのである。

〈運命観の形成〉

そのはじめは、人間は、あらゆることに接し、経験して、その都度、喜怒哀楽を感じ、そのことによって豊かな感性の涵養がなされ、そのことによって逆にまた新たなる好奇の目を輝かせ、そのことによってその真理の探究に、真実の追究に誘導し、また、生活の活性化、人生の意義をも見出すことになる、その基となる人間の感性が、しかしながら体験の重複、同様の経験を繰り返すうちに、いつの日にか、敏感に反応していた感性が、麻痺し、感じなくなってしまう。あげくのはてにはどのようなことにたいしても心動かすことがなくなってきてしまう、という感性の麻痺は、少年のごとき輝きに満ちた好奇心が、加齢とともに失われてゆくことも致し方ないことであり、このことも人間にとっては、ひとつの運命ではないかと独歩は捉えてゆく。年齢をへるに従い、青春期のみずみずしく鋭敏な感性は失われてゆき、平板で凡庸で鈍感な感性へ成り下がってゆくことも人間の運命であるとすれば、むしろ、積極的にこれに抵抗し、いかなるときにも豊かな感受性を保持し、好奇心をもって人生を送るべきではないかと独歩は提唱する。それが、「驚異」する心を追い求める思想として、詩「驚異」（明治三〇年四月『抒情詩』民友社刊）、小説「牛肉と馬鈴薯」（明治三四年一一月『小天地』）に宣言するかのように表現されたものである。運命観はひとつ拡大したが、同時にその運命にたいして、どのように対応すべきかをも生き方の問題として提起したのである。

さて、ここに新たなる運命観がまたひとつ捉えられることとなる。それは、作品「富岡先生」に表出された、「本来自然の富岡氏、その一人は其の経歴が造った富岡先生」と表現された富岡先生の人間性形成過程の問題である。持って生まれた性格が、人生を経るうちに徐々に歪められ、本来の天性の性格が経歴によって異形な性格へと形成された要因には、人生における社会的、経済的、そしてなにより人間関係のゆがみを経験したことが大きく影響していることを指摘したのである。このことは、後に自然主義文学の中心テーマとなる「遺伝と環境」の二つの観点から人間存在を考究する人間観のいち早い独歩独自の人間観の披瀝でもあった。このことは、同時に、人間にとって生まれつきの性格、遺伝として拘束される側面と、社会生活を送るうちに形成される家、家族、人間関係、仕事などによって形成される性格の側面とが相まって人間の運命として規定されたのである。この「遺伝」と「環境」によって形成される性格については、作品「正直者」（明治三六年一〇月『新著文藝』）に反映される。父の過剰な「夫婦生活」の下で生育した〝正直者〟の教師澤村は、自律した精神のもとに生活することがなく、周囲からの正直者という評価に甘んじながら、下宿さきの母娘、校長などの好意を素直にうけるという言動が、結局人倫をはずす結果をまねく話である。しかもその心底には、父からの「遺伝的要素」としての鬱勃たる「性欲」の蠕動が表出しているのである。この「性欲」は、新たな運命のひとつとして把握されるのである。人間にとって永遠のテーマでもある「性欲」の跳梁は、人生の悲喜劇の重要な要因であり、この発露、抑制、自己克己、しいては「愛」、家庭生活、人間関係等々あらゆる人生の局面において喜びと苦痛と苦悩をもって顕在してくるのである。この欲望こそ、重大な運命観のひとつとし

て掌握されるのである。多少の諧謔をもってこの間の欲望に翻弄されることから必死に逃れようとすればするほど悲劇的人生に落ち込んでゆく主人公を描いたものとして作品「女難」（明治三六年一二月『文芸界』）がある。

さて、運命観の範疇が徐々に拡大し、それら運命と規定し、諦観をもって受け入れざるをえない悲劇的喜劇的人生ドラマは、一方で、過酷な「運命」を刻苦勉励して乗り越えてゆく人生、人々の姿をも描出している。前述の「非凡なる凡人」や「馬上の友」（明治三六年五月『青年界』）、「日の出」（明治三六年一月『教育界』）、「山の力」（明治三六年八月『少年界』）などがある。また、「運命論者」（明治三六年三月『山比古』）にあっては、その人力のおよばない、まさに超越的な運命のいたずらに翻弄される主人公高橋信造が、鎌倉の海岸ではからずももらす苦悶の言葉、「今や僕の力は全く悪運の鬼に挫がれて了ひました。自殺の力もなく、自滅を待つほどの意気地のないものと成り果てて居るのです。（略）人の力を以って過去の事実を消すことの出来ない限り、人は到底運命の力より脱るることは出来ないでせう。」という苦悩はほとんど脱出不可能な状況に追い込まれ、運命に翻弄される人間の悲劇的叫びが聞こえてくる。独歩は、この作品を明治三五年秋頃に執筆し、翌三六年三月の「山比古」に発表しているが、この作品の主人公の叫びは、作者自身の叫びであり、解決不能の運命の下に唯々諾々として従わざるをえないため息さえ聞こえてくるようである。しかし、独歩は、この閉塞された運命の桎梏から逃れ出る一縷の道を、思考を、哲学を考案するのである。ここに、独歩の抱懐した思想の大きな転換点があり、新たな思想の展開をうながす思考をなすのである。即ち、作品「夫婦」（明治三七年七月『太陽』）の中で、相思相愛で熱烈な愛情のもとに結ばれた一組の夫婦坂本熊男と千代子が、結婚後とりたてた行き違いなどはなく、平々凡々と愛ある穏やかな生活を送っていたが、どこかに満ち足りない欠けた何かをこの結婚生活に感じはじめ、夫婦ともに悩むのであるが、そのとき夫はあることに考えいたるのである。即ち、「事実は無論消えない、然し事実といふ者は左まで執着すべき価値のあるものでないんだ、事実よりも人の心の方が人に取っては大なる者だ、大なる事実だ。」ということに思い至るのである。

「習慣の昏睡」に陥り、感性の麻痺に思い至らず、また、運命としての過去の事実に囚われるあまりに、かえって現在の生活を謳歌し、将来の展望に思いを馳せることをしない凡庸な日常生活の破綻の危機を、かろうじて脱却する術を見出したのである。

ここに、その文学的出発から常に独歩の頭や感性に囲驍していた「運命」という枠が――運命という枠組みをひとつの観点として人間の様態を眺めてきた独歩の思想、人間観、人生観に大きな穴があくこととなったのである。「運命論者」の主人公高橋信造の位置に居た独歩自身もこの運命の桎梏から解き放たれたことになるのである。

振り返って、ここに運命観の拡大深化をまとめると、人間は、いつの日にか死し、自然の懐に回帰する存在であり、また、人力の及ばない超自然の力によって人生が左右されていること、の二点について痛切に実感していた独歩が、この運命観から出発してその範疇を徐々に拡大し、すり

へり、鈍磨し、麻痺してしまう人間の感性に悲しみと共にこれも致し方ない運命として容認する独歩がいた。それへの抵抗は、アクティブに自らの心と感性を掻きたたせ、常に「喫驚する」ことを求め、新鮮で敏感に反応する「驚異心」を追求することを願ったのである。そしてまた、人間は、「遺伝」と「環境」によってある程度その人生が規制されることをも指摘する。それは、その覆いかぶさった運命の力を甘んじて受け入れ、苦悩の人生を送るか、その力に雄々しく立ち向かう人生を送るか、その悲喜劇の人生模様をも描出するのである。そして、抜け出ることの出来ない運命の糸に絡めとられた現実に直面し、諦観と共に自滅を待つ人物に、独歩は、一縷の抜け道を、脱出の方途を考案するのである。即ち、過去の事実よりも、その事実によって、どのように人間の意識が、心が、感性が動いたかの方が、大きい問題であるということに思い至るのである。人間心理の探求へ向かう独歩の意識が浮上してくるのである。

＜運命観の展開＞

運命の枠に囚われていたことから解放された独歩は、新たな運命観の視点を掴まえるのである。それは、どのように誠実にその人生を送ろうとしても、経済的な問題から、あえなく悲劇的人生を送らざるをえない人々のいることを。とりわけ、都会にあってその日其の日を身を削って生きている日雇い労働者の姿に、現実社会の不合理と矛盾、富の格差と偏在によって起こる悲劇を見つめる独歩の姿がある。いかに人間の連帯意識、仲間意識をもってしても解決不能の厳しい現実社会の実態、同情と愛情による救済の方便はもとより政治的、社会的救済の方途さえ確立していない現代社会の実態こそが、新たなる運命として近代人の上に覆い被さってきている現実をも独歩はとらえているのである。作品「窮死」の主人公文公の死は、その後の日本の近代化の中で政治的、経済的安定と格差是正と情愛のある人間関係の形成を求める成熟した社会を目指すべきこととして常に問題提起をし続けているのである。

これに続いて、人間の性格が悲劇を引き起こす要因となることをもとらえることとなるのである。即ち、外発的な要因による抑制的要素が人間の人生をその主体の意志とは関係なく左右させる力として、換言すればそれを運命と名づけ受け入れていたことから、自ら深く関わり、自らその形成に全幅の責任を負わざるをえない自立した自身の性格が、現実社会の事象、人間関係にあって、醜悪なまでに露呈する姿を。他者を傷付け、社会生活を送る上で恐怖を募らせるような異常な「性格」の暴発することの現実を体験してしまうのである。作品「帽子」は、「性格破産者」とも見まがう人物が登場し、独歩の抱懐する思想の一層の発展、展開をみせたすぐれた作品になっているのである。

田舎町を走る乗合馬車に乗り込んできた「某町の商人」で、「町で中以上の富と勢力を持って居るもの」が、吹き飛ばされた大阪で購入した高価な帽子を農夫が拾い、必死に馬車を追いかけて届けてくれたにもかかわらず、「そんな帽子お前に呉れてやる、欲しけりゃ持てゆけ」と言い放

つのである。農夫の親切心に対して、何等感謝することなく平然として退けたこの男の存在に、独歩は、激しく疑問をもつのである。独歩は、その人生観、人間観にあって、人間に対する、深い慈しみと親愛の情がその基盤に底流しており、全幅の人間肯定の立場を貫いてきていた。しかし、この人物との遭遇は、今までの人間観を大幅に改変しなければならなくなるのである。なぜこのような人物がいるのか、どうしてこのような性格が形成されたのか、この人物の人生、生活背景はどのようなものであったのか、疑問は疑問をうみだすのである。このことを境目に新たに、人間の性格、生き様、心の有り様、等々人間心理の探求へとその鋭敏な独歩の目は向けられてゆくのである。

作品「窮死」（明治四〇年六月『文芸倶楽部』）、「二老人」（明治四一年一月『文章世界』）、「竹の木戸」（同月『中央公論』）等の晩年の作品群は、独歩文学の特徴である主観的抒情性のまさった文体から離れて、近代人の心理を鋭く、しかもその根底にエゴイズムが内包している姿を描出した作品である。

「窮死」にあっては、弁公の親父さんが車引きの若者と口論の末、掘っていた道路の側溝におとされ悶死してしまうが、その折、終始沈黙をまもって車上にいる紳士、富と権勢をえた人物と想像されるが、下級労働者の喧嘩による死という出来事の前に傍観者として心痛めることもなく達観していられるという存在に、作者は、何等言及することをしないが、それに替わって、「土方だって人間だぞ、馬鹿にしゃァがんな、」と親父は日ごろの思いのたけを発する。あきらかに、道路の溝を掘る土方、其の上の道路を走る人力車を引く車夫、その人力車に乗る紳士というように、社会における上下の縦関係を図式しているのである。一方で、文公が立ち寄ったけちなめし屋での土方、立ちんぼう、めし屋の夫婦たちと交わされる、こころ温まる、仲間意識、連帯意識、また、突然寝場所を求めて訪ねた弁公親子の狭い家での情愛のこもった交流など、横の人間関係を重要な要素として図式し、縦横の構図を駆使して人間社会の有り様とそこに息づく人間の姿を描出しているのである。近代社会の抱えた矛盾と不合理性についての構造を摘出した作品構成となっているのである。

「竹の木戸」にあっては、お源、磯吉の夫婦の隣家に、大庭葉蔵の一家があり、竹の木戸を隔てて隣り合わせの住まいでありながら、その生活ぶりは格段の落差があった。温順で誠実、ことを荒立てない純朴な人柄である大庭葉蔵は、取立てて富を蓄積してきたようには考えられない。恐らく、平凡なサラリーマンとして家庭を守り、平穏な日常を送ってきたのであろう。明治人にとって特別刻苦勉励して立身出世の道をひた走りに歩んできた人物とは考えられない。これに対して、磯吉はどうであったろうか。彼は、植木屋として、「怠惰者だか、働き人だか判断がつかない」人物である。妻のお源は、しかしいざとなれば人の三倍も働く人物として信頼をおいている。しかし、生活ぶりは、いたって貧しく、冬を迎えるのに炭が無くお源は困り果て、隣家の大庭家の炭を盗んでしまうことになる。このような生活の苦しみから、夫婦は喧嘩となり、結果、磯吉が桜炭一俵を盗むことになり、それを知ったお源は夫への信頼が崩れ、絶望のあまり縊死してしまうのである。磯吉夫婦には、貧しいながらもたしか

に愛情の交流があった。にもかかわらず、その性格が、生き様が、他者への、とりわけ愛する妻への愛情表現として表出することなく、人生に対するにも、人間に対するにも、仕事に対するにも、怠惰で、なりゆきに委ねる、自立し、自律した精神の欠落が、自らの生き様だけではなく、他者へも多大な影響を与え、人間関係における信頼関係の喪失をうながすこととなった。かろうじて信頼関係において夫との夫婦生活を維持してきた妻お源にとっては、ただ死を選ぶほかはなかったのかも知れない。悲しく切ない人生であった。しかるに、夫磯吉は、二ヶ月ほどのちには、お源と同年輩の女を女房に持って、渋谷村に住んでいたが、矢張り豚小屋同然の住いであったのである。この最後に付け加えられた一説は、独歩の夫磯吉に対する憤りであった。しかし、そのことを声高に叫ぶことをせずに、むしろアイロニー（皮肉）として表現している。独歩の人間肯定を抒情的に描出する世界は全く影をひそめ、否定したい人間性、疑問を持たざるを得ない性格、人柄、への懐疑と諦念がリアリスティックに客観的に表現されたのである。独歩は間違いなく、否定したい人間性、疑問を持たざるを得ない性格の中に、私利私欲に囚われ他者をかえりみないエゴイスティックな人間性のどす黒く、醜悪な相貌を見据えていたと考えられる。

独歩の処女小説が、明治三〇年八月の『文芸倶楽部』に発表した「源叔父」であり、源叔父の悲劇は、最愛の妻ゆりと息子幸助の死であったが、その後の人生を乞食紀州との生活にかけたが、結局人間的情愛を理解することの出来なかった紀州の姿に、絶望し自ら縊れることとなった。しかし、この段階では、作者独歩は、最後に次のような言説を付加していた。即ち、「桂港に程近き山ふところに小さき墓地ありて東に向かいぬ。源叔父の妻ゆり獨子幸助の墓みな此の処にあり。『池田源太郎之墓』と書きし墓標亦此処に建てられぬ。幸助を中にして三つの墓並び」と描写される。ここには、死して後、源太郎、ゆり、幸助の一家が揃って団欒しているかのような想像を想起させる表現であり、人間はすべていつの日にか自然の懐に回帰するという浪漫的結末の情緒が、独歩の主観的抒情性のまさった文体で付加されていた。しかし、最晩年の作品「竹の木戸」では、同じく登場人物の名前に「源」を付し、しかもともに絶望によって縊死する結末であるが、〝源叔父〟の死が、白痴に近い紀州が人間的情愛を理解できなかったことに由来するのに対し、お源の死は、信頼し頼りにしていた夫磯吉の裏切りであり、怠惰な生き様への絶望からであった。しかも、肯定的人間観から懐疑的人間観とでも言える人間内部に巣食うエゴイズムの存在を指摘し、抽出するところまで考究し思想化してきたのである。独歩の人間認識はこの十年間の内に拡大深化してきたのである。

独歩は、すでに結核病をえて病床に臥す日々を送ることとなるが、その最後の小品として奇妙な作品「沙漠の雨」を明治四一年一月『読売新聞』に発表する。沙漠にいる駱駝が、一度も見たことの無い雨というものを見てみたいと神様にお願いする。神様は、その願いを叶えてくれて雨を降らせる。沙漠の駱駝たちは喜ぶ。しかし雨は降り続き止むことがない。雨により光を失った駱駝たちは、止まぬ雨に恐怖感を抱き、今度は、神様に雨を止めてくれるようにお願いするという話である。ここには、明確に、駱駝に仮託した人間の欲望の利己的であることを比喩として訴え

ている。エゴイズムの極致とも言える身勝手な駱駝の要望は、そのまま人間世界に当てはまるものである。多様な人間性の存在をすべて許容し、全幅の信頼をもって肯定する立場を終生持ち続けた作家国木田独歩は、最晩年にいたり、肯定しえぬ、理解しえぬ暗く粘着性のある、そして矯正不可能とも思われる人間性の一側面、誰にでも巣食っているエゴイズムの胚胎に、間違いなく目をむけつつもついに死を迎えざるを得なかったのである。何人にもいえることではあるが、やはりあとわずかでも生が永らえていたならばと夢想するものである。しかし、死の床に臥していた独歩は、雨の替わりに何を求めていたのであろうか。自らがまもなく愛する自然へ回帰することへの思いを馳せていたのであろうか。

（注1）梶井基次郎「ある心の風景」（大正一五年八月『青空』）に「視ること、それはもうなにかなのだ。自分の魂の一部分或は全部がそれに乗り移ることなのだ」と主人公喬が思考する場面があるが、ここに、自然の景物に自らの存在の在り様を投げかけることにより、自己の存在の証をえている主人公がいる。このことは、別稿で論じたい。

（二〇〇七年九月二十八日受理）